

●書評●

八幡明彦編著
企画／N C C 在日外国人の人権委員会
出版／神戸学生青年センター出版部

〈未完〉年表・日本と朝鮮の キリスト教100年

企画 NCC在日外国人の人権委員会
編著 八幡明彦

〈未完〉年表・日本と朝鮮のキリスト教100年



© 神戸学生青年センター出版部

本書は、1883～1992年にわたる日本と朝鮮のキリスト教の歴史をN C Cと在日韓国・朝鮮人とのかかわりを中心として編集された年表である。編者による論文「植民地支配と解放：日本教会と韓国・朝鮮ー在日韓国・朝鮮人とのかかわりを中心としたN C C史の検討」が付されている。表題に「未完」とあるが「まえがき」でN C C在日外国人の人権委員会委員長の日隈光男氏が書かれているように「必要かつ充分な資料が入っている」年表である。

N C Cとは、日本文化センターのことではない。一般にはなじみのない言葉だろうが、「日本キリスト教協議会」のことで、キリスト教のプロテスタント（新教）の連合会のようなものである。プロテスタントのなかでもN C Cに加盟していない教派もあるので完全な連合会ではない。

N C Cは、Natinal Christian Councilの頭文字をとったものなので、本来は国単位のプロテスタントの協議会という意味だ。だから日本キリスト教協議会のことをN C C-J (Japan)とよぶこともある。



現在のN C Cは、戦後に設立されたものであるが、戦前にもあった。ふたつとも同じN

C Cではあったが、正式名称としては、戦前は「日本基督教聯盟」（1923年設立）、戦後は「日本基督教協議会」（1948年設立）である。

「戦後50年」にあたる1995年には、戦前の侵略の歴史を反省の上にたって戦後の50年を問うという様々なとりくみがなされたが、N C Cにおいても戦前、戦後の歴史を洗いなおす作業が行われた。当時N C Cの幹事であった八幡明彦さんは、N C Cの資料室に残されているN C Cの総会記録、新聞等を材料として年表を作る作業を丹念に行ったのである。.

1919年の3・1運動のさきがけとなつた朝鮮基督教青年会館（東京神田）での「2・8宣言」に見られるように、「韓国併合」がなされた1910年代から留学生を中心としたキリスト教者のグループが存在していた。日本における朝鮮人の教会も形成され、1934年2月には1地方会、4中会によって連合会としての「在日本朝鮮基督教会」が設立されている。

戦前のN C Cは、1923年11月に設立総会を開催しているが、在日本朝鮮基督教会がそのN C Cに加盟したのは1936年11月である。そのとき、「在日本朝鮮基督教会」は「在日本」の文字がなくなり「朝鮮基督教

会」と改称されている。朝鮮教会の独自性（独立性）をなくそうという動きの現れであろうが、植民地となった朝鮮の教会が日本で「在日本」を名のことさえも許されなくなつたであろう。

そのNCC（日本基督教聯盟）も、太平洋戦争の始まった1941年には解消されることになる。同年6月に総動員体制のもとでプロテstantの諸教派が合同させられて設立した「日本基督教団」によってその役割は終わったのである。

戦前、朝鮮のキリスト者に加えられた弾圧としては「神社参拝の強要」がよく知られているが、本年表を見ればそれがいかに周到にかつ地方の朝鮮人教会まで徹底的に行われたかを理解することができる。

★

敗戦後、戦時下で無理やりひとつにさせられた日本基督教団からいくつかの教派が離脱していく、プロテstantの諸教派が存在することになる。そして1948年にはその諸教派の連合会としての戦後のNCC（日本基督教協議会）が発足している。ところがその戦後のNCCが戦前の植民地政策に加担したこと等への反省の上に発足したとは言えない。八幡氏は、所収の論文のなかで、戦前のNCCが関東大震災時の朝鮮人虐殺にたいする朝鮮人キリスト者からの訴え、宣教師の植民地支配政策への告発などを黙殺したこと等を指摘した上で、それらの点について何らの総括も行なっていないことを指摘している。

本書の年表としてのボリュームは、戦前、戦後がほぼ同量である。指紋押捺拒否闘争が激しく闘われる1980年代半ば以降は、最低限の記述に押さえられているが、戦後にNCCが戦前の歴史をどう総括しているか（していないか）、在日韓国・朝鮮人問題への取り組み、日本と韓国の教会の交流等についてよく整理されている。

本年表は以上の概括的な紹介からも理解されるように読み物として読んでも一貫性のある内容豊かなものである。加えて、以下の点

が優れているいえるのではないかと思う。

- ① 「NCCと朝鮮」をまとめた本として初めてのものである。
- ② できるかぎり原典にあたっておりその出典も明らかにされている。
- ③ 既刊の日韓(朝)キリスト教関係史の本の関連項目を出典とともに効果的に引用している。
- ④ 戦前の日本各地の朝鮮人教会について丁寧に記録されているのでこのテーマでの地域史研究の糸口となる（神戸に関する記述も多い）。

★

最後に、個人的にとても気になることを書いておこうと思う。

それは左頁の表紙の写真のことだ。この写真は、1940年に「紀元2600年奉祝銃後奉公祈誓大会」で樺原神社参道を行進する日本基督教聯盟の写真である。左右の軍人の間を聯盟の代表が行進しているのであるが、旗の左側を歩くヒゲの人が誰かということだ。青丘文庫の韓哲瞻氏に伺うと風貌からして当時の代表である富田満ではないとのことである。

実は私の祖父（鈴木浩二）は、先に述べた1941年の日本基督教団成立後に総務局長に就任しており、教団の成立後に祖父を含めた代表が伊勢神宮に参拝したことはよく知られている。祖父はおそらく1940年当時は神戸教会の牧師をしていて中央の仕事はしていないと思われるが、ひょっとしたら神戸に近い？樺原神宮には行ったのでは、とも考えられる。私の記憶あるいは写真で見る祖父がこの写真に的人物に似ているような気もするのである（背がもっと低い？）。あくまで歴史は歴史なのだが、少々ハラハラしながらも、その人物の調査を進めたいと思っているのである。

（飛田雄一）

[B5 146頁 1600円、購入方法／1600円+送料（310円）=1910円を、郵便振替<01160-6-1083 財團法人神戸学生青年センター>に送金する]